〔日本の陶磁展によせて〕

赤膚焼について

最近、赤膚焼の作品２点が新に当館の日本陶磁コレクションに加わりました。１点は青木木兎作「赤楽宝珠文茶碗」（カット①）で、もう１点は奥田木白作「金地加彩菊文菓子鉢」（カット⑤）です。青木木兎は奥田木白が天明６年（1786）に築いた小さな登窯で、郡山藩主柳沢保光（堯山侯）や藩財政に寄与して苗字帯刀を許された富豪の小西三郎右衛門などと共に趣味で陶器を製作したと考えられる藩医です。「侯はとくに彼を愛し、汝の製するもの粗にして昼間観る能わず、宜しく木兎焼と称すべし」との言い伝えがあるようですが、木兎は郡山藩の楽焼の指導的役割を果たしていたと考えられます。

木兎は安永７年（1778）に高取藩医の息として生まれ、文化13年（1816）に郡山藩医の養子となり、天保４年（1833）５月にその名跡を継ぎ安政６年（1859）に歿しました。木白が自作の楽焼茶碗を木兎や小西三郎右衛門などに進呈したことが文献から知られ、木白の楽焼研究も彼等との交流を通して行われたものと考えられています。

木兎の「赤楽宝珠文茶碗」（カット①）は胎土の上に赤釉を塗って化粧し、その上から胴部に白泥で大小２箇の宝珠を、背面には小さな宝珠１箇を、それぞれ奔放な筆捌きで描き、透明度の高い上釉をかけて焼成したものです。高台と高台脇は土見せで、高台内は達者な篦づかいで一気に削られています。高台脇に「木兎」小判形印がきっちりと押されています。（カット②）

もう一点の木兎作「赤楽茶碗」（個人蔵、カット③④）は無文ですが、赤色の発色も美事で、また豊かな丸味のある器体は掌に心地よく収まり、楽茶碗の特質を熟知した者ならではの造形ぶりを感じさせます。この茶碗にも高台脇に同じ「木兎」小判形印が押され、その下には花押が深々と刻まれています。この２点の作品だけからも木兎は単なる趣味の茶碗作りの程度をはるかに凌駕していることがわかり、〈茶碗作りの名人〉との言伝えも十分納得がいきます。

一方、木白作「金地加彩菊文菓子鉢」（カット⑤）は木白が弘化２年（1845）以降に製作を初めたとされる金銀絵作品の代表作の一つです。黒楽地の全体に金箔を貼り、両側面に白色顔料の胡粉で盛りあげた光琳風の菊花を黄・緑の二色を添えて雅やかに表しています。削りこんだ底部中央には「赤膚山焼」の印が押されています。

天下に赤膚焼の名を高めた名工、木白の作域は広く、楽焼から上絵付、錦手へと至って、茶陶もそのほとんどを手がけています。写しものに巧みであったばかりでなく、釉薬と陶土に独自の工夫を重ねて、いわば木白流の茶陶をうちたてています。特に後年の仁清写しや柳里恭に倣った色絵作品には木白の豊かな造形感覚が、すぐれた陶技によって見事に示されています。

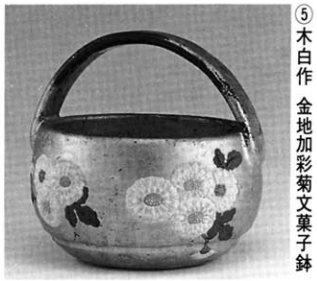
①木兎作 赤楽宝珠文茶碗

②同茶碗 刻印

木白の楽焼については、その本格的陶芸活動に伴い、天保10年（1839）８月28日に稗田村の瓦屋安の瓦窯で黒楽を、同年11月には赤膚山で従来の薬の調合方を変更して黒楽を焼成したことが木白の『楽焼之口伝控帳幷に石焼』から知ることが出来ます。

そもそも赤膚焼は南都春日社の土器座、火鉢座、瓦座などの土物の日用雑器を中心にして発展しましたが、室町時代以降の根拠地は西京、すなわち今の薬師寺の西南附近一帯にあったようです。そしてその製品を京都でも販売するなど販売網の独占を計って繁栄したことが、文明年間（1469～87）の『三十二番職人歌合』や『大乗院寺社雑事記』などの文献から知られます。『三十二番職人歌合』にはその火鉢売の姿を詠んだ歌が収められています。また『大乗院寺社雑事記』の長禄３年（1459）５月８日の条には、各座をあげたうちに「ヒハチ西京」と見え、この火鉢造座は興福寺の大乗院に属していたと考えられています。これらの製品はいずれも西京に産した良質の粘土に依るものですが、特にその中でも江戸時代前半に南都の名産として名を馳せたものは「奈良風炉」でした。このいわゆる土風炉は天文23年（1554）『茶具備討集』には「風炉　奈良風炉　銅風炉…」とあって、茶湯の擡頭と共に奈良風炉が次第にとりいれられ、愛好されていた様子がうかがえます。正徳２年（1712）『和漢三才図絵』にはそれが絵入りで紹介されていますが、それは現在も茶湯で使用される陶器製の風炉であり、同書はこの製品の作者として「天下一宗四郎」の名を併せて記しています。この宗四郎とは、元来は西村姓であった京都の永楽家の三代西村宗全（1623年没）の弟にあたり、天下一の名誉号を下賜されたと伝えられるほどの名手で、その作品には「天下一宗四郎」の印を押しています。初代の西村宗印（1558年没）は西ノ京に住し、春日神社の供御器を作る土器師でしたが、武野紹鷗好みの土風炉を作り、以来土風炉作りを家業としたようです。

③木兎作 赤楽茶碗 個人蔵



⑤木白作 金地加彩菊文菓子鉢

さて、西ノ京の西端、五条山ではこのような上手物とは別に日用雑器を作っていたと思われますが、次第に活況を呈するのは、柳沢堯山侯（1753～1817）の治政下になってからです。そもそも赤膚焼という呼称も、この堯山侯が寛政（1789～1801）の末頃に五条山の陶工治兵衛に窯のある地にちなんで下賜したという伝承のある「赤ハタ」の瓢印、あるいは治兵衛の持参していたという「赤膚山」印を使いだしてから流布したと考えられています。（『大和文化財保存会収蔵品目録 陶磁器編―赤膚焼―』村上泰昭編、1995年、及び「大阪、奈良のやきもの―船木佳代子」『日本やきもの集成⑦近畿Ⅱ』平凡社、1981年、の両書から要約させていただきました。吉田宏志）

④同茶碗 刻印と花押

季刊 美のたより No.121
平成９年11月14日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.